未来をひらく

平成23年３月11日の大震災で、石巻市立大川小学校では全校108名中、74名の児童が死亡あるいは行方不明となりました。教員も１０名が亡くなっています。

108名といっても当日欠席、早退、保護者が引き取りに来た児童がおり、最終的に校庭にいた児童は70数名で、４名だけが奇跡的に助かりました。教職員も助かったのは１名だけです。
学校管理下で、このような犠牲を出したのは大川小学校以外にありません。大川小より海に近い学校はもちろん、もっと海から遠い、上流の学校や保育所も逃げています。

震度６強というそれまで体験したことのない強い揺れが３分も続いた後、大津波警報が発令され、防災無線やラジオ、市の広報車がさかんに避難を呼びかけていました。その情報は、校庭にも伝わっていて、子どもたちも聞いていました。
体育館裏の山はゆるやかな傾斜で、椎茸栽培の体験学習も行われていた場所です。迎えに行った保護者も「ラジオで津波が来ると言っている。あの山に逃げて」と、進言しています。スクールバスも待機していました。そして「山に逃げっぺ」と訴える子ども達。

校庭で動かずにいる間に、津波は川を４㎞遡り、堤防を超えて大川小を飲みこみました。15時37分、地震発生から51分、警報発令からでも45分の時間がありました。

子ども達が移動を開始したのはその１分前、移動した距離は先頭の子どもで１８０ｍほどです。なぜか山ではなく、川に向かっています。ルートも、狭い民家の裏を通っています。しかも、そのまま進めば行き止まりの道です。時間的に、最初の波で堤防から水があふれた後の移動開始です。津波が来たのでパニックになったと言えます。

時間も情報も手段もあったのに救えなかった、危機感を感じていながら「逃げろ」と強く言えなかったのはどうしてかを議論しなければなりません。どうして組織が機能しなかったのかです。あの日から、自分自身に言い聞かせている、重い重い言葉です。

守るべき命、しかも守ることが可能だった命を守れなかった事実から目を背けてはいけません。警報が鳴り響く寒空の下、校庭でじっと指示を待っていた子どもたちに耳を澄まし、目を凝らせば、方向性は見えてくるはずです。

誰も悪意をもっていたわけではありません。先生方はみんな一生懸命だったはずです。でも、救えなかった、それはなぜかを、先生方のためにもきちんと考察したいと思っています。先生方は、黒い波を見た瞬間「ああ、〇〇すればよかった」と後悔したはずです。その後悔を無駄にしてはいけません。学校という組織が本来の目的に向かうための議論につなげていくつもりです。

学校だけではなく、私たちの周りにある様々な概念、価値観、システムを見直すことは、東日本大震災で、現代社会が突きつけられた宿題のような気がします。その宿題は、情報や物が氾濫する一方で、多忙感、閉塞感が蔓延し、本質的な豊かさが失われつつある我が国の方向性にも影響を与えるほどの意義をもつように思います。子ども達の命を真ん中にして、誠意をもって向き合えば、はじめはかみ合わなくても必ず方向性は見えてくると私は今も信じています。

現在、私たちは、関心をもってくださっている方々と、「組織の意思決定のあり方」「命の大切さ」「命を預かる意味」「心のケア」などをテーマとしたワークショップや、授業づくりに取り組んでいます。
東日本大震災では多くの尊い命が犠牲になりました。その命に意味づけをするのは、生かされた私たちの役割です。

大川小の校歌には「未来をひらく」というタイトルがつけられています。
大川小学校は、始まりの地です。もう一度、命の大切さやよりよい学校のあり方を確かめる場所であるべきです。小さな命たちが、未来のための大切な意味を持てたとき、私たちの向かう方向で、あの子たちがニコニコ笑っている気がします。

震災から４年になりますが、国内外の多くの皆様が我が事として考え、祈り、そして応援してくださいます。報道や、学者の方々からも貴重なご意見をいただいています。ほんとうにありがたいことです。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

佐藤　敏郎
小さな命の意味を考える会　代表
スマートサバイバープロジェクト特任講師

四　年

東日本大震災の大津波で多くの命が失われ、その中に大川小学校の子供たち、そして我が宝である我が子までも失った。そんな事実と向かい合って来てもう四年になりました。

四年が経過して変化したことは、

・生活スタイルが変わった。（生活環境や家庭内環境）良くも悪くも。
・人との接触の仕方が変わった。（被災者同士の絆は深いと感じる）
・被災地の復興状況　等々

そんな生活環境の中での変化は確実にあるのですが、心の中の復興というのは全然進むこともなく、変わるものも無い、といった感じです。

「時間の経過が心を癒してくれる」ということもありますが、我が子を、家族を失った悲しい思いは簡単に癒されるものではありませんね。

毎日の親子のスキンシップがピタッとあの日でストップ。
朝出かけるときのタッチ。寝るときにおやすみのタッチ。
3月11日朝のタッチが最後のスキンシップ。
そして、おはよう・行ってきます・行ってらっしゃい・ただいま・おかえり・おやすみのあいさつ。

未だに思い出せば悔しくなるし悲しくもなる。そして涙する。
いつまで泣いてるんだ、などという人もいないでしょう。いっぱい泣いても良いと思います。何も隠すこともないし隠れることもない。いっぱい泣いて良いと私は思います。

だから、そんな悔しい思いを伝えていかなければなりません。

■「あの時、何が起きたのか？」

地震発生で津波襲来！
そうじゃないんだ。地震と津波のことではない
その時、何をしなければならなかったのか？
その時、何をしようとしていたのか？（何を考えていたのか？）
その時。何をしていたのか？
子供たちは決められた通りに先生の指示に従い校庭で待機していた。
先生に逆らって逃げる子供はいなかった。
みんな良い子だった。
これが検証委員会では答えを出すことが出来なかった。

いろんなことを考えていると自己を責めるようになってくる。
迎えに行けば良かった。
迎えに行かなかった自分が悪いんだ。　などと。

今更、何かができるわけではないが、目をつむって見ると自分が子供を迎えに行ってたくさんの子供たちを避難させている自分がいるのが見えてくる。
それで全員無事に助かった
でも現実にならない妄想であることに気づくと、助けるために何をしなければならないのか？と考えるようになる。
いつもこんな過去をつくり妄想している

■バカなオヤジのたわ言

2015年はバックトゥーザフューチャーの舞台なのであれば、それが現実に可能になるのであれば、あの時あの時間に戻って全員を助けたい。未来を変えたい。

ドラえもんがここに来てくれるのであればすぐにでも来て欲しい。
タイムマシーンであの時あの時間に戻りたい。そしてどこでもドアで避難させたい。
ドラえもんは2112年生まれ。

その時になってからでも良いので助けに行って欲しい。あと97年。
そうなると、孫の子供　あるいは　孫の孫まで正確に伝えて行かなければならない。
言葉の伝え方もあるが、正確に残せるもので伝えていきたいですね。

■「未来へ伝えていかなければならない」

①何を伝えていくのか？
②何を教訓としていくのか？
③検証委員会の２４の提言か？
④どのように伝えるのか？
　教科書か？　副読本か？　祈念碑へ刻むか？
　何に残すにしろ、未来予想図みたいな未来へ投げかけるものが必要である。

「今後の防災」って形でいろんな方々がいろんなことを話していますが、理想論だけではなく、現実に目を向け、身に感じることがあって語っていただきたい。

それで、子供たちへの教育で意識付け。などというのも出ていますが違うと思う。

子供たちへ教育する前に、その教育をする教員への教育が重要である。そのことに触れている話を聞かない。理想論だけで「子供への教育」とか言うのは大人の自己満足な話。
教育する者がしっかりと教育を受けていなければ教育できない。勉学と同様である。

また、伝えるにあたりしっかりとした想いももって伝えなければ、ただの読み聞かせになる。
実際の被災地へ行っての実習であったり、これから発生するであろう南海トラフを想定し兵庫県や和歌山県そして四国地方などに行って、現在の防災のあり方で不備なところなどを学んできたほうが良い。

大学を卒業して教員免許取って配属が決まると思うが、配属前に数ヶ月間はそのような研修が必要と感じる。
大学では学ばないことを通して教員として必要なスキルを身につけるべきである。

■防災管理の充実

学校としてどのような防災減災活動をしていくのかは重要である。
各学校では様々なことを想定して訓練をしていると思うが、訓練しているだけで終わればそれでよし、やったからよし、になっていないか？
それではよくならない。ＰＤＣＡを回す事の意味を理解していない。
実施したら、チェック⇒アクション　で次にもっと良くするために新しいプランが出来る。

危機管理マニュアルは誰が作成しているのか？これも納得いかないことばかり。
学校周辺のことや地域のこともよくわからない先生たちが作成し承認されている。
何の役に立つのか？
マニュアルは学校の先生方で作成するのはもっともだが、それを学校周辺や地域のことを知っている方々の意見を取り入れなければ良いものにならない。
マニュアルについては全教職員とＰＴＡ役員で作り上げ、ＰＴＡの全体会でそれを保護者に周知しなければならない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

語り出せば切りがありません。

悲しみの中で、自分たちにいったい何ができるのか、迷い、悩みながら四年が過ぎました。いつも私たちを支えてくださっている全国の皆様には、ほんとうに感謝しています。
どうか、あの子たちの命を心のどこかに覚えていてください、いつまでも。

遺族　鈴木　典行

校舎のあちこちに

名前のシール

はがれないシール

消えない名前

同音異義語　　2014/1/19

去年の今頃
寒い日

「法要」と入力したつもりが
「抱擁」と変換された

同じ読みだったのか

みんな来てるよ　　2014/3/11

雪がちらついて
冷たい風が吹いて
みんなでしゃがんでいたあのあたりに
みんな来てるよ

2011年３月11日　午後２時46分から３時37分までの動き

１ 子どもを救う方法は十分あった。

体育館脇の山は傾斜が緩く、低学年でも登れる。椎茸栽培の体験学習も行われていた。５分あれば入釜谷方面への避難も可能。スクールバスもすぐ出られるように待機していた。地震から津波到達までは５１分。地震による倒木はない。

２ 地震発生後、校庭に避難し点呼。津波が来るまで校庭待機。

子ども達は不安がっていたが、校庭ではたき火の準備も始まっており、避難する雰囲気ではなった。たき火のための缶は少なくとも二つ用意されていた。山や道路の様子を見に行った教員はいない。早い段階で校庭にとどまる決定をしたことがうかがえる。もしくは話し合いが十分なされなかったのかもしれない。引き渡しの対応に追われていたわけではない（人数的にも多くない）。

３ 移動時間は数十秒。民家裏の細道を通り、津波が来るのに川に向かっている。

校庭から移動を開始したのは大津波がいよいよ迫って、川からはすでに水があふれていた時である。一応上級生が先頭となっているが、整列する余裕などなく、列は乱れており、学年は入り交じっていた。

「三角地帯へ移動」という指示で移動開始。「もう津波が来ているから、急いで」と言われ、児童の列は自転車小屋の脇から出て、あわてて裏道の方に走り、家の脇を通り、県道に出ようとしたら川から波が来た。先頭にいた児童が引き返し、山に向かった。児童が追い込まれたのは、最も狭く、山の斜面も急な場所である。

３時３５分に車で家を出た近くの人が学校前の県道を通ったとき、児童は道路に出ていない。校庭から移動した距離と時間は先頭の子で約180m、１分ほど。

４ 避難可能な情報は十分あった。

遅くても３時前後には、ここまで津波がくるだろうという情報があった。大丈夫だろうという意見もあったが、早い段階で裏山への避難を進言した子ども、教員、地区の人、迎えに来た保護者がいる。指揮台の上にあったラジオも盛んに大津波警報、高台への避難を連呼していた。市広報車は３時２５分に高台避難を呼びかけ釜谷を通過している。

※ 詳しくは小さな命の意味を考える会HPをご覧ください。 http://311chiisanainochi.org/wp/

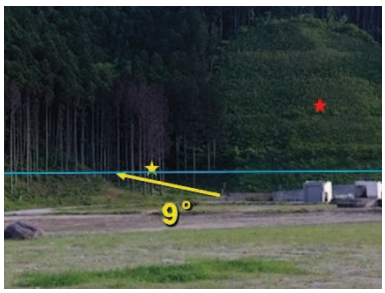
学校管理下での事故　学校に７０数名の児童11名の教員

14:46 地震発生　体験したことのない強い揺れ
14:52 大津波警報　かつてない緊迫した警報

15:37
津波到達

A 体育館裏の山

平成21年まで毎年3月にシイタケ栽培の体験学習が行われていた。傾斜は9°

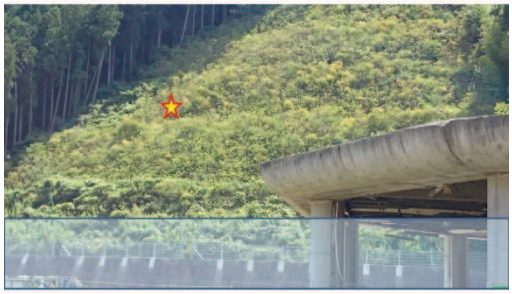


マラソン大会コースのすぐ脇、全校児童・教員全員が知っている。この人のいる所まで登れば助かった。右は海側からの写真。★は立っている人の位置。★はBで登っていた位置。青線は津波の高さ

B 校庭脇の山

崩れないように土留め工事が施されている。低学年の授業でも登っている。

上は幅4mほどのコンクリートのたたき。



アオダモの植樹をしたバットの森の登り口。徒歩で5分ほど。

ラジオ　指揮台の上

広報車、防災無線
「津波が来ます、高台へ」

迎えに来た**保護者**
「津波が来る、逃げて」

運転手方向転換し待機

先生　**地区民**

子どもたち
「ここにいたら死ぬ」
「山さ逃げっぺ」

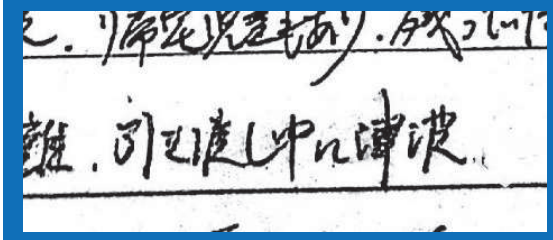
時間はあった
助かる手段は全員が知っていた
大津波警報は全員に伝わっていた

なぜ50分間校庭にとどまったのか
子どもを守る組織として機能できなかった

向き合うべきものは何か

2011.4.9　最初の説明会
「地震による倒木が多く、山へ避難できなかった」と説明（地震による倒木は1本もない）

2011.6.4　2回目の説明会
「倒木があったように見えた」に訂正
避難開始は津波の12分前と説明



2011.3.16　市教委への報告
～ **2012.5月に判明**

このような報告がありながら「12分前に避難開始」と説明

2011. 6. 4　市教委による第２回目の説明会での読み原稿

聞き取り調査をもとにしたとのこと。ところが聞き取り調査のメモ等の資料はすべて廃棄してしまいました。そのため曖昧になっていることが多くあります。

防災無線のサイレンがなって、「大津波警報が出ました。海岸沿いは危険ですので高台に避難してください」という声を聞いた。それを聞いて、「ここって海岸沿いなの」という女子や「山さ逃げよう」とかいう男子がいたが、そのまま引き渡しを続けた。

「山さ逃げよう」という子どもがいたことを市教委は説明しています。子ども達も聞き取り調査で証言したと話しています。
ところが、聞き取り時の資料がないので、根拠は説明できず、説明は二転三転しています。検証委員会でも進展しませんでした。亡くなった友だちのため一生懸命話した子ども達の証言はなかったことにされたままです。

2012. 3月 市教委としては押さえていない	「『ここって海沿いなの』という女子」と書くと「『山さ逃げよう』とかいう男子」と書きたくなる	子どもの記憶は変わるもの	「山に逃げよう」という子どもがいたかどうかは重要ではない	子どもの証言ではなく、保護者に聞いたのかもしれない

津波はすごい勢いで子どもたちを飲み込んだり水圧でとばしたりした。後ろの方で手をつないだりしていた低学年の子どもたちも津波に飲みこまれた。ほとんど同時に学校側からも津波が来て、学校前は波と波がぶつかるように渦をまいていたという。

津波が襲った状況を説明している部分。その場面を見ている人の証言のはずですが、市教委はその根拠を説明できずにいます。検証委員会の聞き取りでは「webの動画かもしれない」と答えています。検証報告書ではふれられてもいません。

こうした矛盾点をあげればきりがありません。矛盾点の指摘とその言い訳の繰り返しで、核心的な議論になかなか進みません。
つらく悲しい出来事ですが、だからといって目を背けないでほしいのです。ましてやごまかしてはいけないと思います。
どうすれば、子どもの命にしっかり向き合った話し合いができるのか、模索しています。

宮城県名取市の自分のクリニックが被災してから、この4年間で511名の被災した方を新患で診てきました。しかし、四角い診察室でできることには限りがあり、もともと国際協力を専門にしてきたこともあり、（認定）NPO法人「地球のステージ」の活動として「心理社会的ケア」を行ってきました。
これは世界では既に主流である心のケアモデルですが、日本にはまだなじみの少ないものです。しかしとても日本人の思考に添っています。それは「作品を創り出すことで、心のケアを遂げていく」という内容だからです。日本人はもの作りにおいてとても長けています。

大川小学校のご遺族の皆さんと接しながら思うことは、何人かの皆さんが向き合おうとされており、そこから想像力が刺激されて、少しでも前向きになろうと努力する姿に触れることができたことです。
「小さないのちの意味を考える会」の代表、佐藤敏郎さんはまさにその先駆者です。

心のケアの最終段階、第三段階は「世界との再結合」です。心の傷を受けて、自分たちだけがこんな思いを抱え、世界の中でマイノリティ（少数派）になってしまったような気持ちを吹き飛ばし、実は自分たちが世界を変える力を持った存在なのだと気づくことにより、この「世界との再結合」が完結します。
津波で受けた経験を昇華させ、世の中や学校現場のためになっているという思いを持つことで、ご遺族の皆さんの心のケアは一つの到達点を迎える。そのために今必要なことは、真実を語るものがたくさん出てきて、世の中に一定の理解という合意点が得られ、辛かった経験を社会が未来に向かって利用しようという意志を見せることです。

大川小学校の出来事は、日本人全ての、いや人類全ての意識を変革させる力を秘めています。ぜひ、ご遺族の皆さんの一言一言に耳を傾け、その目指すものに共感して共に歩いて行こうという意志を表明することが大切だと思います。
今、それを表明する時期です。
私は、心のケアの専門家としてこの「世界との再結合」を見届けたいと思っています。

桑山　紀彦
心療内科医
NPO法人「地球のステージ」代表理事